

書評

阿部泰郎 著

『中世日本の宗教テキスト体系』

高橋 亨

序章で「宗教テキスト学試論」という。テキストという視座から、聖典や儀礼、図像や芸能など、日本の宗教現象について曼荼羅（マンダラ）的な考察をめぐらした書物である。この十年余りの成果が集積されているのだが、その基盤には名古屋大学文学研究科の21世紀COEプログラム「統合テキスト科学の構築」（二〇〇二～二〇〇六）と、グローバルCOEプログラム「テキスト布置の解釈学的研究と教育」（二〇〇七～一一）がある。阿部氏はその思想部門の研究推進者であり、私もまた文学部門から多くの活動を共にした。

阿部氏は、これらの研究プロジェクトの理論的な基盤となったテキスト理論を、意欲的に自身の研究に取り込み、いわば我田引水の「宗教テキスト学」としてこの書物に結実した。それがまた国際的な研究集会における交流ネットワークに支えられていることも、巻末の「初出一覧」に明らかである。阿部氏自らの企画による数度の

国際研究集会に私も参加したが、二〇〇八年にプラハのカレル大学で私が企画した国際研究集会で、阿部氏は「聖徳太子絵伝の世界像」を発表し、翌年の報告書に収められている。

まずは、本書の広大な体系的論述を展望するために、IV部十八章からなる目次を抄出しておくことにする。これに、序章と終章が付されている。

第I部 聖徳太子宗教テキストの世界

第一章 聖徳太子の世界像——中世太子宗教テキスト

体系の形成

第二章 複合宗教テキストとしての聖徳太子伝と絵

伝

第三章 霊地における太子像——院政期の聖徳太子

崇敬と四天王寺・太子廟

第四章 中世聖徳太子絵伝におけるテキスト複合

第II部 寺院経蔵宗教テキストの世界

第五章 寺院における宗教テキストの諸位相

第六章 宗教テキストによる国土の〈経蔵〉化——

一切経と埋経の融合

第七章 宗教テキストとしての経蔵と目録

第八章 灌頂儀礼と宗教テキスト——儀礼テキスト

としての中世密教聖教

第九章 中世密教聖教の極北——文観弘真の三尊合

行法テキスト

第三部 儀礼空間宗教テキストの世界

第十章 仏教儀礼における宗教テキストの諸位相

第十一章 宗教テキストの核としての願文

第十二章 修正会・修二会と儀礼テキスト

第十三章 儀礼の声

第十四章 真宗寺院の宗教空間と儀礼テキスト

第四部 神祇祭祀宗教テキストの世界

第十五章 中世熱田宮の宗教テキスト空間

第十六章 真福寺神祇書のテキスト体系

第十七章 書かれたものとしての神道——密教聖教

の中の神祇書

第十八章 修験道における宗教テキスト空間

この目次からだけでも、仏教と神道をめぐる、古代から現代にいたる宗教テキスト解説の軌跡が、曼荼羅のよ

うに体系化されていく発想が伺えよう。「中世」はその歴史的な中心であると同時に、体系を裏づける根拠となる資料の世界でもある。阿部氏はこれまで、仁和寺や醍醐寺、また大須真福寺などの文献テキストを徹底的に調査し、読み込んできた。それとともに、聖徳太子絵伝の絵解きや儀礼、当麻寺の迎講や東大寺二月堂の修二会（お水取り）などの儀礼や芸能のフィールドワークの豊かな体験もふまえられている。

そうした論者による文字と声、儀礼空間や絵や芸能の表象をも含めたテキスト分析の布置そのものが、曼荼羅的な構想を成り立たせている。そのことは、図1-6太子宗教テキスト体系の座標（第一章、38頁）、図2-10上宮王院の宗教テキスト体系（第二章、84頁）、図6-1宗教テキストとしての一切経の位相と布置（第六章、175頁）、図8-1守覚法親王のテキスト世界（第八章、221頁）、図12-2修二会所作の儀礼体系（第十二章、313頁）、図15-6中世熱田宮宗教テキスト空間の座標（第十五章、400頁）、図終-15北野天満宮における天神宗教テキスト体系（終章、502頁）といった、論の全体にわたる体系図によって明示されている。

新出の資料を含む、豊富な絵などの図像が挿入されていることも、この書物において貴重であり、学術資料と

してのみならず楽しい。まず、表紙カヴァーの表は、白い三峯型の富士山の上を、黒駒に乗って朱の衣をなびかせて飛ぶ聖徳太子の美しい絵で飾られている。裏表紙には聖徳太子の童子像が合掌して立っている。そして、口絵のカラー図版には、杭全神社蔵の聖徳太子絵伝のうちの二幅、その裏に後醍醐天皇像がある。この書物には多くの神仏や歴史上の人物たちが登場するが、代表的な主人公をひとりあげれば聖徳太子である。その聖徳太子をめぐる古代から現代にいたる言説と表象が、まさしく曼荼羅的な論述世界の基軸をなしている。

曼荼羅の時空は、中心から周縁へ、聖なるものから俗なるものへと布置されている。その共時的な体系と組み合わせられて、通時的な歴史を捉える論述もなされていく。その曼荼羅的な思考と歴史的な思考とは、ほんらい異質な発想であろう。それらが混在して織り合わせられているところに、本書の独自の魅力とともに難解さもある。阿部氏は、たとえば次のように立論をはじめている。

『日本書紀』によって「聖徳太子」と呼ばれる存在となった、滅亡した上宮王家の主であった厩戸皇子は、一方で「法王」という称号を与えられ、釈尊にも重ねられる存在として、「尺寸王身」（法隆寺金堂釈迦如来像光背銘文）の本尊を祀る法隆寺に、その

記憶が伝承された。律令国家成立の許で、太子は「皇太子」かつ「摂政」となって天皇の政治を輔佐する先蹤として、王朝の体制を根拠づける役割を付与されたといえる。こうした太子像を規定し創り出すため、古代に成立した幾つもの太子伝記のうち、それらの集大成として、やがて中世に太子伝の正典というべき位置を占めたのが『聖徳太子伝暦』であった。このテキストでは、太子のおよそ五十年の生涯を天皇の紀年の枠組みにおいて記録した年代記の許で、太子の事蹟がその言辭を交えた逸話ないし靈驗譚として記される。歴史書と伝記とは『伝暦』において重なり合い、複合しているのである。その跋文には、先行する各種の太子伝がプレテキストとして参照されたことが示されているが、その中には「四天王寺壁聖徳太子伝」の如く、壁画形式の太子絵伝の銘とおぼしいテキストも含まれており、文字テキストの次元に留まらない図像を中心とする諸位相の太子伝承がそこに流れ込んだであろうことを示唆している。（第一章、31頁）

歴史的な実在人物としての「聖徳太子」については、それが『日本書紀』による虚像である（大山誠一）とか、やはりその存在を認めるべきだ（東野治之）といった論

がある。これらに対する阿部氏の立場は、本文ではなく注（第一章）³で示され、『書紀』はそれ以前の「伝承」を「正史の上に改めて布置」し「歴史」化したのであり、「聖徳太子」の「存在をめぐる議論が実在か非在かという次元に終始するだけでなく、その思想的意義について論ぜられるべきであろう」という。

歴史的に「実在か非在か」ということよりも、「その思想的意義」が重要だというのである。その根拠となるのが、十世紀末に『聖徳太子伝暦』に集成された「文字テキストの次元に留まらない図像を中心とする諸位相の太子伝承」なのである。その「中世」を中心とする展開や「思想的意義」については、天王寺や慈円、また親鸞と聖徳太子絵伝との関わりなどとして、具体的に詳しく論じられている。それらについては、それぞれの興味と関心に応じて読んでいただくほかはなく、私が生半可で下手な要約するのは止めておく。

その代わりに、阿部氏が指摘しているわけではないが、本書を通して、あらためて「聖徳太子」と『源氏物語』あるいは（紫式部）の思想とのテキスト関連について考えさせられた私見を記しておきたい。かつて私の学生時代に、『聖徳太子伝暦』の著者が紫式部の曾祖父藤原兼輔であるという説もあって胸をときめかせたが、残念な

が現在では否定されている。とはいえ、その原型となつた「平氏伝」の面影を伝えるのが『三宝絵』（九八四）である。その著者源為憲は、紫式部の父藤原為時とも親しい文人であった。為憲は、皇女のために、「日本における総合的な仏法のテキスト化」を構想し、「むしろ敦煌遺文中の変文と変のような、あるいは平安末期の説話絵巻のような作品を想起させる、女手の仮名文の詞と物語絵の組み合わせにより成り立つ絵物語の一変奏であつたと推定される点で、すぐれて和様化された仏法テキストではなかったか」という（第二章、61頁）。

さらには、「真名に対する仮名、暗に対する褒、聖に對して俗の次元に降り立って作られた書物こそが日本の仏法をよく象るテキストであるとは、考えてみれば驚くべき逆説的な創造の試みではなからうか」（第五章、153頁）ともいう。この重要な視座とも関わるのであろうが、聖徳太子の極楽往生を冒頭に据えた慶滋保胤『日本往生極楽記』については、空也、当麻曼茶羅や二十五三昧会と関わって名を挙げられているが、第I部には指摘されていない。慶滋保胤の出家の師であり、二十五三昧会を主催した源信もまた、『源氏物語』の横川僧都のモデルであつた。紫式部の父藤原為時も、若き日に源為憲らとともに、二十五三昧会の前段階の勸学会に参加し、花山

朝で政治改革を試み、やがて摂関家の権力を確立する兼家とその息子たちに敗北していた。

「女手の仮名文の詞と物語絵の組み合わせにより成り立つ絵物語の一変奏」は、平安末期の説話絵よりは、より直接的に同時代の『源氏物語』にいたる作り物語と通底させてよいであろう。『源氏物語』のプレテクストとしての『聖徳太子伝暦』については、光源氏七歳の高麗相人の予言などで直接的な影響関係の指摘があり、若紫巻では、北山の僧都が、光源氏に聖徳太子が百済から招来した数珠を贈っている。土佐光信によりハーバード本源氏物語画帖の桐壺巻に描かれた、元服に臨む光源氏の角髪姿なども聖徳太子と類似している。あるいはまた、四天王寺の「霊地」化も「御堂関白道長の絶頂期」であったという（第三章、108頁）。

とはいえ、そうした引用関連があればこそ、『聖徳太子伝暦』をはじめとする聖徳太子信仰のその後の展開と、『源氏物語』の「思想的意義」との対比も有効な視座となろう。聖徳太子伝承は慈円や親鸞などを媒介にして日本仏教の中枢を形成していったが、「狂言綺語」である『源氏物語』作者紫式部は地獄に墮ちたとも言われた。白居易の「狂言綺語」を「転翻」して「讚仏乗の因」となす説、あるいは紫式部も観音の化身だといった逆転の

発想によって、中世の源氏学は『源氏物語』を正統化しようとした。しかしながら、『源氏物語』の光源氏をはじめとする作中人物は、熱心に仏教を信仰したにもかかわらず、極楽往生できたと表現されている人は皆無なのである。紫式部自身も、日記の中で自らの極楽往生を絶望的だと記している。

聖徳太子の聖性には、『源氏物語』の作中人物や作者のような、心の闇や不安は絶無なのであろうか。安居院流の唱導を確立した澄憲もまた、第五章や第十章で重視されている院政期の人物であるが、地獄に墮ちた紫式部を救済するための源氏供養において「源氏一品経表白」を書いた人でもあった。「唱導は、仏神の（聖なるもの）の世界から世俗の卑近な職能民の生業までにわたる全てを媒介し、結びつける権能を有していたのではないか。それは遡って、藤原明衡の作になる『新猿楽記』が描いた、諸職の芸能者群像による祝祭の世界に連なるであろう」と阿部氏もいう（第五章、165頁）。その「諸職」には遊女や琵琶法師なども含まれている。

この書物がいう「宗教テクスト」は、仏典や寺院の儀礼、高僧にまつわる聖なるテクストばかりではない。あるいは卑俗や邪惡とみなされる民間信仰に至るまで、その中心から周縁へと広がる曼荼羅的世界は、多様かつ豊

穰なのである。そのことは、第Ⅳ部の「神祇祭祀テクスト」諸論文に端的に示されている。ここでは、中世熱田宮の神祇をめぐるテクストの諸相や『とはずがたり』、真福寺本の神祇書、密教聖教の中の神祇書や守覚法親王との関わり、修験道などが論じられている。

後深草院の愛人であり、宮中を追放されて出家した二条の告白的回想録が『とはずがたり』である。その出家の契機として、『源氏物語』六条院の女楽を模した催事があった。二条はそこで紫上のような役割を望んだが、明石君に見立てられた屈辱に耐えられずに反抗し、尼となり、西行を模した旅に出たのである。本書では、その二条が「遁世修行の旅」において「天王寺より太子墓に参籠し、經典を奉納した」ことを、「遊女長者妙相」と並べて聖徳太子信仰の例としている（第三章、127頁）。

また、「高僧であっても免れぬ人の定め、いわゆる『逃れぬ契り』の物語は、やがて中世には女犯破戒の伝承を持つ浄蔵についても語られ（『三国伝記』『とはずがたり』）、あるいは賢学という名で道成寺伝承と融合した物語草子（『日高川草紙』）として絵巻化されて室町期には流布していた伝承である」とし、それが「吒枳尼法の血脈」として「即位法の縁起」と通じる「中世世界を深く貫流する仏教神話の文脈」だという（第八章、231頁）。

その二条が正応四年（一二九一）の熱田宮炎上を目撃して記録していることを、「託宣によって本地から垂迹に至る神号が訓示され、そこに神格が次第に生長していく姿」を示す『熱田太神宮御託宣記』にみえる「後深草法皇の姫君」の口を介した託宣とつなげてみえる。その託宣の神詠の歌は「荒れ果つる 我が宿問はぬ恨みをば隠れてこそは思ひ知らせん」であり、これが後世に長く伝わったことも「神のメッセージもまた和歌に収斂するのであった」と論じられている（第十五章、390～393頁）。この書物の研究成果を検証するためには、八十頁に余る詳細な注、そして、神仏名を含めた人名、書名・遺品名・儀礼名・寺社名の索引や豊富な図表一覧が有効である。

第Ⅱ部「寺院経蔵宗教テクストの世界」では、「一切経」や「聖経目録」「灌頂儀礼」「密教聖経」など、王権とも関わる仏教寺院の中心にある諸問題を論じている。そこには、書物を探訪し、阿部氏自身が手に取って調査した感動の息づかいが生きている。第Ⅲ部「儀礼空間宗教テクストの世界」には、東大寺二月堂の修二会、儀礼における願文、浄土往生の講式や念仏、城端別院の虫干法会と、仏教儀礼の中核に関わる見聞の論述がある。こちらには、フィールドワークの体験に充ち満ちたリアリ

テイがあり、読者の側の体験と重ねて読んでも楽しい。
いずれにせよ、この広大な知の曼荼羅世界を、解読し
理解し尽くそうなどと思うよりも、興味のある一端から
入り込んで遊びかつ学ぶべき書物であろう。

〈二〇一三年二月刊、名古屋大学出版会、A5版、
五九八頁、七、四〇〇円＋税〉

（たかはし・とおる／名古屋大学名誉教授）